

は問題はない。しかし、幹細胞のcytokine添加による検討やG-CSF receptorの検討については今回は省略する。

治療として、rG-CSF 150-250 $\mu\text{g}/\text{day}$ の連日投与は有効であると思われるが、隔日投与では効果は得られない。本症例はrG-CSF投与は肝障害を誘発するので、長期投与は出来ない。なお、rG-CSFの投与によって、骨髓中に見られる前骨髄球の成熟は期待出来ないことが明らかな成

績を得たことは必要以上のrG-CSFの投与によって血栓症が誘発される可能性がある事、さらにrG-CSFによって白血病が誘発される例の報告もあり、本症例の如く骨髓低形成を示す例ではその可能性が高いと考えられるので、rG-CSF必要最小量短時間の使用に留めるべきであろう。

6. 施設入居要介護高齢者の口腔ケアについて

○森岡 尚美¹⁾²⁾、道谷 弘之¹⁾²⁾、武藤 壽孝²⁾、
金澤 正昭²⁾、三浦 宏子³⁾、松田 浩一⁴⁾

(緑星の里歯科診療所¹⁾、口腔外科学第1講座²⁾、口腔衛生学講座³⁾、歯科保存学第2講座⁴⁾)

近年、高齢化社会を迎え、要介護高齢者の医療福祉の充実が社会的課題となっており、歯科領域においても、口腔ケアを含めた歯科医療のあり方が問われている。そこで今回われわれは、苫小牧市にある社会福祉法人「緑星の里」の特別養護老人ホーム「陽明園」において、直接介護・看護に携わっている職員24名の歯科保健意識を調査すると共に、入居している要介護高齢者72名の日常生活自立度と口腔内の状況について調査し、口腔ケアにおける介護・看護者とのチームアプローチについて検討したので、その概要を報告した。

介護・看護者の歯科保健意識に関するアンケート調査結果では、口腔衛生に対する意識は比較的高く、より実践的な歯科教育を求めていることが明らかとなった。

次いで、入居者72名を対象に、1. 日常生活自立度 (JABC)、2. 日常生活動作 (ADL)、3. 口腔衛生に関わるADL、4. 口腔清掃状態、5. 歯の問題、6. 義歯の問題の評価を介護・看護者によって行い、さらに、

4, 5, 6の項目については歯科医師による評価も併せて行った。

その結果、口腔清掃状態は、自立・要介助に関わらず、不良な者が多く、4割前後に認められた。歯科医師と介護・看護者の評価の比較では、口腔清掃状態の評価においては差はなかったが、歯の問題及び、義歯の問題ありとした者の数では、歯科医師に比べ、介護・看護者の評価が有意に低いという結果が得られた。

これらの結果を踏まえ、介護・看護者との協力により入居者個別の口腔ケアプランを策定・実践し、1ヶ月を経過した時点で歯科医師による再評価を行なったところ、短期間であったにも関わらず、口腔清掃状態においては著明な改善が認められた。

以上のことから、入居者の口腔ケアには、介護・看護者に対する歯科保健教育と、介護・看護者と歯科医師・歯科衛生士のチームアプローチが必要であると思われる。

7. 漂白法による前歯変色歯の色調改善

○河合 治¹⁾、荊木 裕司²⁾、小鷲 悠典¹⁾
松田 浩²⁾

(歯科保存学第一講座¹⁾、歯科保存学第二講座²⁾)

日常臨床において、我々は、しばしば変色歯と遭遇する。前歯部変色歯に対する処置法としては歯冠補綴によって審美回復を図る方法が主に行われている。

しかしこれらの方法では、歯の切削が必ず必要となり、これに対し近年、可能な限り歯冠を保存する治療方法が考案され試用されている。その、ひとつに漂白法があり、

その中でも生活歯の漂白法は効果が得難いと考えられている。

生活歯の変色には外来性の色素を原因とするものと内在性の色素を原因とするものがある。この中で特に問題となってくるのが内在性のテトラサイクリンステインによる、沈着である。今回、テトラサイクリンによる有髄